

石川一十三専務理事慰労の食事会が開催されました

石川専務理事は、令和元年度の総会開催日（5月24日）付で事務局長を退任されましたが、10月8日にザ・セレクトン福島で瀬谷理事長のお声かけで石川ご夫妻を招待して理事監事の役員13名参加の昼食会が開催されました。

冒頭、瀬谷理事長がご挨拶され「石川さんが20数余年にわたり福島日仏協会で両国の文化交流、会話・料理教室・映画鑑賞会等の活動に尽力されたことに敬意を表します。特に、東日本大震災直後に郡山市で開催された《フランス革命記念日祝賀レセプション》は、一流のシェフと多数の飲食店の賛同を得て地元の名士ほか2000名超の参加者で大盛況となり、駐日フランス大使のご挨拶も熱のこもったものでした。このレセプションは日仏両国の友好を深める震災後の国内初の復興を支援するイベントとなり、フランス本国にも感銘を与えました。仏政府からレジオンドヌール・シュヴァリエ勲章を理事長、専務理事2名に叙されたことの名誉は石川専務理事の気配りと行動につきます」と話された。

理事長から感謝状・記念品贈呈の後、駐日ローラン・ピック大使閣下直筆の感謝状が届いた事を菅野輝栄理事から紹介され、山田奈々子氏（渡邊副理事長代理）から花束が贈られて、高橋雅行副理事長の乾杯の発声で、食事をしながらの懇談となりました。

参加者からはご夫妻に対して、永年の活動でのご苦労や思い出話がやり取りされ、最後に石川専務理事から謝辞をいただき、なごやかなお開きとなりました。

専務理事からの大げさでなく明るい時間帯でとの強いご意向を受けて昼の食事会となりました。

石川一十三様、ヒサ様の益々のご健勝を祈念致します。

（事務局長 石堂信也）



感謝状をご夫妻で



大使直筆の感謝状

2019年度秋季 実用フランス語技能検定試験（通称 仏検）

11月17日（日）会場：福島学院大学で恒例の秋季仏検が実施されました。

フランス語は29ヶ国の公用語になっており、フランコフォニー（フランス語話者の共同体）の考え方から世界各地で活動が行われています。

日本では主催（公財）フランス語教育振興協会 後援文部科学省で、毎年春季・秋季の2回1次試験 その後2次試験があります。国内38ヶ所、パリで計39会場となっています。2020五輪・パラ五輪では英語仏語が公用語です。



福島会場では29名の受験者があり福島日仏協会会員の方も受験されています。合格の結果が待ち遠しいですね。

当協会フランス語会話教室では年間30回の授業が行われております。入門コースから上級者コースまで6講座に分かれており、講座の申込みは随時受付中です。

既に、会員の皆様にはご案内していますが 少し早い“Joyeux Noël!”

《福島日仏協会・福島萩友会・福島シャンソンの会合同クリスマス会》が開催されます。

日時：12月17日（火）18：00～ 会場：ザ・セレクトン福島 会費：6,000円

日頃のシャンソン練習成果の美声をお楽しみください。申込期限12月11日です。



第32回東京国際映画祭でフランス作品が2冠達成

アジア最大級の映画祭「第32回東京国際映画(TIFF)」が10月28日から11月5日まで開催されました。コンペティション部門に選出された長編映画14作品のうち、ドミニク・モル監督のフランス映画『動物だけが知っている』が2冠を受賞しました。



© Jean-Claude Lothar

TIFF クロージング・セレモニーが11月5日、東京国際フォーラムで行われ、各賞が発表されました。ドミニク・モル監督の『動物だけが知っている』は、観客賞と最優秀女優賞(ナディア・テレスツイエンキービッツ)の2冠を獲得しました。主演男優のドゥニ・メノーシェが壇上に上がり、映画が受賞した2つの賞を手渡されました。

このほかにもオーレリアン・ヴェルネ＝レルミュージオー監督のフランス映画『戦場を探す旅』と、フランスが参加した国際共同製作映画であるアリツ・モレノ監督の『列車旅行のすすめ』(フランス、スペイン)、ハイロ・

ブスタマンテ監督の『ラ・ヨローナ伝説』(フランス、グアテマラ)が、コンペティション部門に出品されました。

フランスの作品はコンペティション部門以外の部門でも上映されました。第76回ヴェネツィア国際映画祭コンペティション部門に出品されたオリヴィエ・アサイヤス監督『WASP ネットワーク』をはじめ、2019年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門審査員賞を受賞したオリヴァー・ラクセ監督の『ファイアー・ウィル・カム』、アンカ・ダミアン監督のアニメ映画『マローナの素晴らしき旅』が、世界の話作のショーケース「ワールド・フォーカス」部門で観客に紹介されました。

今年のコンペティション部門は、中国の女優チャン・ツイイーが審査委員長を務め、フランスの女優でプロデューサーのジュリー・ガイエが審査員を務めました。ミカエル・アース監督のフランス映画『アマンダと僕』が昨年受賞した最高賞の東京グランプリは今年、フラレ・ピーダセン監督のデンマーク映画『わたしの叔父さん』に授与されました。

アンスティチュ・フランセ日本
映像・音楽部門統括マネージャー
オリヴィエ・デル

在日フランス大使館ニュースレター 22号 2019年11月より

スキマの植物

我が家は畑地を宅地化した土地で、庭はかなりの広さがあり松や金木犀、楓やツツジ、アズノの木々が植えられている。片隅にバラや萩などもあって季節ごとに花が楽しめる。

庭の雑草取りは母が丁寧に行っていて綺麗にしていたが、私が物ぐさのせいもあり母が亡くなってからは雑草に次第に覆われ、二階から見下ろすと芝生は見えなくなり雑草の庭に。そんな訳で、秋の終わりに植木職人に木々の手入れと雑草取りを頼むのが常となった。春に面倒で除草剤を撒いても、次々に雑草が生えてその生命力には呆れてしまう始末だった。植物学者によると雑草と言う植物は無く、必ず名前が有ると言う。だが至る所に生えてくる可愛げの無さには閉口するものの、根性とも言える逞しさは驚くばかりだった。

最近、「スキマ植物」と言う言葉を知った。道路のコンクリートやアスファルトの割れ目や歩道の縁石の間の隙間にしっかりと根を張っている植物のことで、花を咲かせている物もある。最近、我が家の北側のブロック塀とコンクリート道路の僅かな隙間にコスモスが根を張り、健気に細い茎を伸ばし薄紅色の小さな花を十三個ほど咲かせているのに気が付いた。栄養も無いようなこんな所に…。



我が家の北側道路のブロック塀沿い隙間に花を咲かせたコスモス

コスモスは一年生の草花。近くにコスモスが見当たらず、何処からか種が吹き寄せられて偶々隙間に入り込んだのだろうが、若干日陰に成り易い場所なので存分に伸び上がれなかったのか。しかし植物は水と二酸化炭素に太陽光があれば光合成で栄養分を摂る事が出来る。窮屈な隙間だが、植物学者の塚谷裕一東大教授に言わせると「スキマはじつは植物たちの“楽園”なのだ」そうである。なぜか。

道路際などの隙間では車の排気ガスや埃に取り巻かれ過酷な環境に置かれているかに感じられるものの、隙間に他の植物が入り込むことが難しく競うことなく太陽光をたっぷり独り占め出来る。雨水は隙間に浸み込むとアスファルトで覆われていて蒸発することが少なく、枯れる心配は無い。さらに車の排気で二酸化炭素も思い通りに摂取出来て、隙間こそ植物にとって「楽園だ」と言うのが理由だ。

それから車を運転して気が付いた。道路脇に何とスキマ植物の多いことか。その逞しさには改めて感心する。道路ばかりでなく、石垣や屋根瓦、電柱の支柱カバーやコンクリート塀のひび割れや木の幹など隙間があれば何処にでも入り込む。ヒガンバナやゼラニウム、ヒメヒマワリなども花を咲かせて灰色の道路に彩りを添えている。憎まれものの雑草だが、時にはゆっくり眺めてみるのも悪くない。

菅野輝栄(会員)

・参考資料 塚谷裕一著「スキマの植物図鑑」中公新書(同人誌「自由人」33号初出)

私のフランス語日記

Il y a deux ans, j'ai voyagé en Bourgogne.
 C'était l'automne.
 Les vignes en automne étaient belles.
 C'était exactement le paysage que j'avais vu dans le film.
 « Ce qui nous lie »
 « Retour en Bourgogne » est le titre japonais.
 Le thème de ce film est le lien familial.
 C'est la fabrication du vin.
 C'est la vigne en Bourgogne.
 Quand je suis allée, les vendanges étaient terminées,
 Les feuilles jaunes et les collines dorées.
 C'est agréable de ramasser les raisins laissés sur place!
 J'ai pu imaginer le vin délicieux.
 Un jour, je voudrai visiter cet endroit à nouveau...

Ce qui me relie à la France, c'est la culture,
 c'est les paysages,
 c'est le vin.
 Puis, j'ai visitée Beaune.
 Au restaurant en face de la place, il y avait des œufs au vin,
 du coq au vin. Bien sur, j'ai mangé des escargots avec du
 chablis frais.
 D'ailleurs, j'ai visitée une cave de chablis,
 et j'ai déjeuné dans un restaurant vinicole.
 Le pain au fromage comme une pâte à choux était
 délicieux.
 Ce qui me relie à la France...
 Serait-ce la gastronomie?

Natsuko Reizei

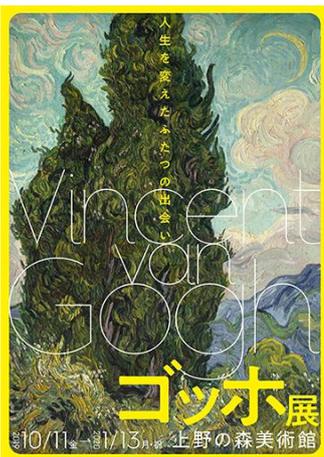


2年前、ブルゴーニュ地方を旅してきました。
 季節は、秋。
 この時期のブドウ畑は、とてもすてきでした。
 ちょうど、映画で見た世界そのものでした。
 「私たちが結ぶもの」
 「おかえり、ブルゴーニュへ」こちらが、邦題です。
 この映画のテーマは、家族をつなぐものです。
 それが、ワイン造り。
 ブルゴーニュのブドウ畑なのです。
 私が訪れたときは、ブドウの収穫が終わっていて、
 ブドウの葉は黄色に染まり、黄金色一面で見事でした。
 ところどころに残ったブドウをつまんでみると、甘い！
 おいしいワインができるのが想像できます。
 いつかまたこの地を訪れたい。。そう思いました。

私とフランスをつなぐもの、それは、文化、
 それは、風景、
 それは、ワイン。
 次に、ボヌヌを訪れました。
 広場に面したレストランでウフ・アン・ムーレット、
 コック・オーヴァン、もちろん、冷えたシャブリと
 エスカルゴもいただきました。
 シャブリのワイナリーも訪れました。
 ワイナリー併設のレストランで食べた、シュー生地
 のようなチーズ味のパンがおいしかったです。
 私とフランスをつなげるもの。。
 それは、美食ということになりますか？！

会話教室受講生 冷泉奈都子

次回は赤城みうさん、お願いします！



上野の森美術館「ゴッホ展」 Vincent van Gogh

会 期：2019年10月11日（金）～2020年1月13日（月）

※休館日：12月31日（火）、1月1日（水）

入 場 料：一般 1,800 円、大学・専門学校・高校生 1,600 円、中学・小学生 1,000 円

開館時間：9：30～17：00（金曜、土曜は 20：00 まで開館）

オランダで牧師の子として生まれ気性が激しく 27 歳の頃画家を志すも 37 歳で死亡。画商の弟テオに最後まで支えられた生涯だが作品は多い。油彩画 860 点、水彩 150 点、素描 1000 点余、最も有名な作品「ひまわり」。前半のハーグ派との出会い、パリに出るから印象派との出会い、晩年は南仏アルル地方で製作した。オランダのハーグ美術館から 24 点で 1/3 を占めており、ゴッホの初期作品に焦点を当てたものです。晩年作は良く知られた「麦畑」「糸杉」と続き、これほどの大がかりな「ゴッホ展」は必見です。

北緯 68 度を歩く

話が後先になるが、帰国時のこと。ノルウェーのローカル空港でチェック・インしようとする、カウンターに居るべき係員が誰もいない。スト中か？と辺りを見廻すと、自動機の前に列がある。(自分でやるの？できないよ！) 思い返せば、成田出国時も自動機を通して、スタンプなしだった。これからのパスポートは、出国・入国押印の無い、空白頁の多いものになるのか。さびしい。(パスポートは記念スタンプ帳ではないのだが)



さて、今回の歩き始めは、スウェーデン北部、ノルウェーと国境を接する国立公園・アビスコから。9月下旬のこの地方は、朝は霜が降りる。くさもみじを踏み、清流に沿って、黄葉した木立ちを進む。太陽は時計盤の11時付近までしか上らず、その陽を惜しむように樺の葉は金色に輝き、短い秋を彩っている。晴れた日中は汗ばむほど。河原で小休憩。川の水は飲めるという。冷たくておいしかった。この日は往復18キロ歩いて、公園内のロッジ泊。



ロフォーテン諸島に4泊

翌日はノルウェーへバス移動。スカンジナビア半島をスウェーデンと分け合った国。複雑に入り組むフィヨルドをもつ。その北西部にロフォーテン諸島がある。北緯68度。大小の島々が点在し島と島には橋が架けられて、さながら“しまなみ海道”。ロフォーテン最大の港町スヴォルヴァー

まで約5時間。この間のバス旅が本当に素晴らしい。

さざ波ひとつ無い鏡のようなフィヨルドの海面に、険峻な山容が写りこみ、どちらが空か海なのか。平地の少ないこの地は、水際まで牧草地がつづき、海と陸を区切っている。羊は潮風に吹かれながら草を食む。“しまなみ海道”を行くこの道は、E10（イーテン）と呼ばれ、130キロ先のロフォーテン最西端の村・オーまでつづく。

スヴォルヴァーのスーパーで、不足気味の野菜、果物などを買こむ。物価は高い。品物により15~25%の消費税が付加されている。特にアルコールは高く、360ccのビールは日本円で税込約千円。

翌朝、更に西の町・レイネに向かう。ロフォーテンで最も美しいといわれる町。タラ漁の盛んなこの町には、いたる所に丸太で組んだタラ干場がある。漁の最盛期は2月から4月という。オフシーズンの今は。港にも、町にも人影がない。湾に沿って並ぶ漁師小屋はロイブーと呼ばれ、宿泊施設となっている。外観はアースレッド、窓枠は白で統一されており、小窓にはしゃれたカーテンが吊られてとても可愛いらしい。小屋は独立しており、各戸に寝室、シャワー、トイレ、キッチンが付いている。快適だ。

ところで、この地の山というのは、フィヨルドからいきなりそそり立つ断崖絶壁をいい、垂直に切り立った岩壁に苔が貼りつき、容易に人を寄せつけない。「アルプスの頂きを海に浮かべたよう」と形容される。その中でも、最も低く安全に登れそうな場所を見つけ、歩く。野生のブルーベリーを摘みつつ、山頂に着くと、見事な景観に、息をのむ。ガイドブックのうたい文句以上の素晴らしさ。

下山後の夕食には、地元産の名物料理をいただき、この上ない満足で、レストランを出た21時頃、頭上に一刷毛の白い筋。それは、揺れながら緑色に変化し、くるりと渦を巻きはじめた。カメラなど出しているヒマはない。次々と形を変え、位置を変え、瞬時もとどまることがない。緑色が薄桃色に転じたかと思えば消え、再び現れる。この夜のオーロラの出現は最高のプレゼントだった。夜空にゆらめく宇宙の神秘は、科学的に説明はつくだろうが、不思議な感動と畏怖を覚えずにはいられなかった。

レイネで二晩過ごした朝、はじめての雨。昨日登った山の頂きはうっすらと白い。標高、高低差共に、わずかに367メートルの“山”でも、ここ北極圏ではふもとの雨は山頂で雪になる。

雨のE10を西の最先端・オーに向かう。ここはE10の最終地。この先に道はない。

中脇ゆき子（会員）

